令和元年 11 月８日

愛　南　町　議　会
議長　内倉　長藏　殿

産業厚生常任委員会
委員長　鷹 野 正 志

所 管 事 務 調 査 報 告 書

産業厚生常任委員会の所管事務の調査を実施したので、愛南町議会会議規則第７６条の規定により、その結果を下記のとおり報告いたします。

記

《第１回》

１　日　　時
　令和元年 10 月１日（火）午後１時 30 分から

２　開催場所
　議員協議会室

３　出席委員
　鷹野正志、坂口直樹、原田達也、山下太三、中野光博、山下正敏、
　那須芳人、吉村直城
　内倉長藏（オブザーバー）

４　欠席委員
　なし

５　調査事項
　「宇和海アコヤ貝大量死の現状と対応について」

６　説明員の職氏名
　水産課　　課長　長田　岩喜
　　主査　広瀬　琢磨（海洋資源開発センター）

７　調査内容
　今回のアコヤ貝の大量斃死についての説明を長田水産課長が行った。
　先ず初めに７月中旬ごろよりアコヤ貝の状態が良くない旨の生産者からの報告に端を発し、８月上旬に稚貝の斃死が本町全海域で確認されたことに対し、水産課をはじめ関係機関での対応等時系列で説明。
　稚貝の大量斃死の情報を受け、水産課と愛南漁協で「愛南町真珠貝斃死対策会議」を設置し、これまでに会議を３回開催した。会では、現状の把握と原因の究明、今後の対策について組織的に進めている。更に県におい

ても10月２日に愛媛県アコヤガイへい死対策協議会が設置され、今後総合的な対策を検討するとのこと。

次に現状であるが、愛南漁協は状況把握のため８月上旬から中旬にかけて母貝養殖業者を対象にアンケートを実施、結果愛南町全域で稚貝の大量死が発生し、１ヶ月間で稚貝で約60%、母貝で16%もの斃死を確認。先日まとめた漁協の最新情報では、品種の内訳として国産貝で74%、ハーフ貝で56%であった。現在は、稚貝・母貝共に斃死は止まっており、貝自体も回復傾向にあるとのこと。

原因については、現在感染症と環境の両面から究明を行っている。まず感染症については、斃死貝を国の増養殖研究所と県魚類検査室にサンプルを提供し専門的見地から分析を行ってもらっている。さらに町の魚類検査室でも細菌類の検査を実施している。

環境面での究明については、愛媛大学南予水産研究センターと愛媛県水産研究センター、愛南町海洋資源開発センターで海況データの収集と分析を行っている。

今後の愛南町の対策としては、１月孵化による種苗生産を追加実施、これにより母貝不足に対応する。また、今回のような非常事態に対応できる稚貝の生産体制の確立をはじめ新養殖品種による副業支援等行っていく考えである。

何より環境変化に強いアコヤ貝創出を最重要課題として取り組んで行く旨説明があった。

その後、水温等環境変化や感染等委員からの質疑を経て次回10月４日に養殖業者の現状や愛南町海洋資源開発センターでの研究状況等含め現地調査を行うことを決定。

《第２回》

１　日　　時

令和元年10月４日（金）午前８時から

２　視察及び協議場所

現地（網代、油袋、家串の真珠母貝養殖業者、海洋資源開発センター）
及び議員協議会室

３　出席委員

鷹野正志、坂口直樹、原田達也、山下太三、山下正敏、那須芳人
内倉長藏（オブザーバー）

４　欠席委員

中野光博、吉村直城

５　調査事項

「宇和海アコヤ貝大量死の現状と対応について」

６　説明員の職氏名

水 産 課　　課長　長田　岩喜、

水 産 課　　主査　広瀬　琢磨（海洋資源開発センター）

7　参考人の職氏名

愛南漁協　　内海支所長　前田　浩

8　調査内容

10 月１日に行った第１回本委員会の宇和海アコヤ貝大量死の現状と対応についての机上審査を踏まえ、母貝養殖業者のアコヤ貝の斃死の現状について生産者からの説明等現場の生の声を含め聞く中、斃死の原因究明を早急に求める声あり。

その後、愛南町海洋資源開発センターにて、アコヤ貝の餌となるプランクトンの生産現場の視察及び優良品種の作出に向けた取組みについての説明や、新養殖品種の副業支援対策としてブロッコリーや河内晩柑を餌とする「ウニ」をはじめ「ヒジキ」「ヒロメ」等の試験養殖現場の視察を行い、帰庁後、水産課や愛南漁協による補足説明の後取りまとめを行った。

9　調査結果報告（まとめ）

８月上旬から愛南町で確認された真珠貝大量斃死は、全国的にも真珠母貝生産の主要生産地である本町にとって、基幹産業を揺るがすだけでなく、優良なアコヤ貝を開発、作出しているだけに、真珠業界をも脅かす大きな問題である。

本町水産課と愛南漁協は連携し、８月 21 日にはいち早く「愛南町真珠貝斃死対策会議」を立ち上げ、現状把握、原因究明、今後の対策について組織的に進めており、内海地区における７月中旬から８月中旬の斃死状況については、稚貝 60%、母貝 16%とのことである。

症状は貝殻の内部を覆う外套膜が縮んで死んでしまう現象であるが、原因については、水温の急激な変化、餌の減少などの環境変化や、感染症などを視野に多方面から調査しているものの、未だ原因は解明されていない。

当委員会では、10 月４日に、内海地域の網代、油袋、家串の生産組合員の現地調査を実施し、現場の生の声を聞かせていただいた。

どの地区の生産者も、一斉に「斃死の原因究明」をいち早く知りたいとのことであった。10 月２日に「愛媛県アコヤガイへい死対策協議会」が設立されたが、当委員会として、専門的な研究機関での早期原因究明を求める。

また、一部回復の兆しはあるものの、次期の母貝不足や外套膜萎縮により貝殻が内部変形した状態で玉入れした場合の真珠の品質と作業性を懸念する声、また今でも予断を許さない状況であり「来年もこのような状況になれば、休業あるいは廃業せざるを得ない生産者も出るかもしれない。」とのことであった。

秋種苗や早期孵化により種苗を生産するなど、母貝不足に緊急な対応を要請するとともに、稚貝の無料配布や補助金を出すなど資金面からも助成支援し、今後も稚貝・母貝の安定的な供給ができるよう求める。

最後に、愛南町海洋資源開発センターでは、環境変化に強い耐性貝の育種や稚貝用飼料プランクトンの生産等に取り組んでおり、今後も優良な種苗生産に向け、更なる研究・開発に取り組んで頂きたい。

また、海藻のヒロメやマガキ貝、河内晩柑やブロッコリーを餌としたウニの試験的養殖をしており、今後真珠生産者の副業として、また愛南町の新たな特産品としての開発・活用可能性に大いに期待する。

以上、産業厚生常任委員会の意見を集約した調査結果報告とする。